東京における「させていただく」

松本　修

「させていただく」との出会い

「させていただく」（あるいは「さしていただく」）という表現に私が最初に関心を持ったのは、もう一〇年も前のことだった。古い時代の日本語に触れてみたいと、昭和一四（一九三九）年の映画『暖流』を見ていたとき、主人公である病院長令嬢・高峰秀子に対して、看護婦の水戸光子が、「あたし、きょう限り病院やめさしていただいたんですの」と挨拶するシーンに出くわしたのである。私はたいへんに驚いた。いくつもの書籍から教えられて、「させていただく」は、東京では戦後、それも昭和三〇年代以降に広まった表現であると信じ込んでいたからである。

「させていただく」はまた、関西から流入した言葉であるとも言われてきた。この映画の監督・吉村公三郎は関西出身だから、不用意にこの言葉を混入させてしまったのではないか。そんな疑いも抱きながら、同年発表の岸田國士の同名の原作小説をチェックしてみると、場面は違うものの「させていただく」がいくつも見つかった。「あたくし、勝手にさせていただくわ」「いろんなことを覚えさせていただくわ」などのごとくである。岸田國士は四谷生まれの東京人である。これらは昭和一〇年代前半の、東京の現実を反映したセリフと考えていいだろうと思われた。

さらに、戦後の作品ではあるが吉永小百合主演の映画『伊豆の踊子』を見ていたら、ここでもふたつ見つかった。そこで川端康成の同名の原作小説（昭和二［一九二七］年）に当たってみると、そのうちのひとつが同じ別れのシーンで使われていた。

皆もお送りしたいのですが、昨夜晩（おそ）く寝て起きられないので失礼させていただきました。

自らの身分の低さを承知している旅芸人の男は、旅に同行し

てくれた一高生に対して、敬意を込めて「させていただく」を使っていたのである。

これはどうしたことなのだろう。「させていただく」は、古くから東京でも普通に用いられていたのではなかったろうか。そんな疑問が生じたのである。

戦前の東京に「させていただく」はなかったとする意見など

戦前の東京に「させていただく」はなく、戦後、昭和三〇年代以降に急激に広まったものであると、それまで私が信じていた根拠は、多数の研究者の「発言」資料などに学んだことにある。そのいくつかを発表年の古い順に見てゆくことにしよう。

まず『現代の敬語』（敬語講座6・明治書院・一九七三）の座談会「現代敬語の問題点と敬語の将来」（出席者　奥山益朗、北原保雄、沢田允茂、戸塚文子、大石初太郎［司会］）を見てみよう。

北原　「……させていただく」というのは、これはどうなんですか。戦前よりも戦後のほうが、非常にふえているんでしょうね。

大石　「……させていただく」の発想は関西ですね。関西の「……させてもらう」。

奥山　「もらう」ということばは、関西のことばですね。あれを翻訳して、「いただく」になったわけですね。

大石　ですから、はいったのはいつか知らないですが、戦後、東京では盛んに使われるようになったといわれているんじゃないですか。

奥山　「本日休業させていただきます」ね。これは、私は三代目の江戸ッ子なんですけれども、少なくとも戦前は言わなかったことばですね。

戸塚　言わないですね。「本日休業仕り候」。

大石　「……させていただく」がピッタリするような場面も、もちろんありますけれどもね、「……させていただく」とまで言わなくったっていいじゃないか、と思うような言い方がありますね。

次に、『日本語対談』（岩淵悦太郎・一九七八）における「日本語が日本人を作る」と題された対談を見ていこう。この中で、中野重治氏が、「寄付させていただきました」など、近年の「させていただく」敬語を「非常に不愉快に思う」と述べ、「あんなことはいつごろからですか」と質問するのに対して、岩淵悦太郎氏は次のように応対している。

岩淵　わたしは昭和十三年に大阪高等学校の教師になって

赴任したんです。東京では「本日休業」という素気ない看板が出てたのに、大阪へ行きますと「本日休ませていただきます」という看板が出ているんです。

中野　ははあ。

岩淵　「させていただく」という言い方は関西のほうではそのころ普通に使われていましたね。

そして「させていただく」について、岩淵氏は「慇懃無礼」と述べ、中野氏は「非常にいやですね」と応えたあと、次のよう語り合っている。

岩淵　極端なのは、これから話をしなければならないという場面に立たせられて、これから話をいたしますという場合に、「話をさせていただきます」というような言い方をするんです。

中野　責任転嫁ですね。

岩淵　話をするなと言われたって話をしなきゃいけないんだから、「話をいたします」とか「意見を申します」と言っていいのに、「話をさせていただきます」とか「意見を申させていただきます」という言い方が最近非常にはやっています。われわれ古臭い人間からみると、非常に気になる言い方なんですけども、言ってる本人は非常に丁寧に言ってるつもりなんです。

次に、『国語年鑑』の昭和五八（一九八三）年版にある、渡辺友左氏による「させていただく」に関する記述を見ることにしよう。「アルバムの完成は六月下旬を予定しております。お申込み順に発送させていただきますので、お早めにお申込み下さい。万一品切れの場合は代金を返却させていただきますので、悪しからずお許し下さい」といった例を掲げて、次のように述べている。

傍線を付したような「させていただく」の用法が、最近東京でもとみに広まっている。「発送します」「お返しします」よりも丁寧だと意識しているからに違いない。（中略）私は東北の生まれ育ちだが、このような用法は嫌いだ。たいへん抵抗感がある。嫌な用法が広まってきたなと思う。雨に降られて、他人の家の軒先に「雨宿りをさせていただく」。ハイキングなどで路傍の民家に立ち寄り「水を飲ませていただく」。「縁側に腰をおろして、休ませていただく」。このような「させていただく」の用法には、なんの抵抗感もない。わたし自身よく使う。理由は、わたしが雨宿りする行為、水を飲む行為、縁側に腰をおろして休む行為が相手に何らかの負担や迷惑、犠牲を強いることになるからだ。

次に、『上方ことばの世界ー懐徳堂記念講座より』（徳川宗賢編・一九八五）から、寿岳章子氏の講演「関西ことばの基層」の発言を拾ってみよう。

新村出先生がまだお元気で、私などにもしばしば会ってくださっていたころの思い出ですが、偉い先生のことでございますから、私は全身耳にして、なんでもおっしゃることを伺っていたんですけれども、ふと先生が、「私など関東の人間は、京都の人なんかがさせていただきますとか、させてもらいますとかいうと非常に卑屈に聞こえて、ちょっとそういう表現を使う気になりませんね」とおっしゃいました。

さらに『「ことば」シリーズ24　続敬語』（文化庁・一九八六）の座談会「敬語の適切な使い方」（出席者　井出祥子、角藤久介、小金沢一、野元菊雄、宮地裕）も見ておこう。

宮地　「させていただく」敬語、これはある人の説だと、東京で広がったのは大体昭和三十年ぐらいからだというんですよ。東京でも、例えば「休業させていただきます」いうのは、昭和の初年ぐらいからみた人があるという記録がある。だけど、東京で広がったのは、大体昭和三十年代からだろうというんですね。それは関西から広がったんだろうと思うんですが、確かにおっしゃるとおり、今非常に使いますね。それがむしろ若い人のほうに広がっている可能性は高いと思います。

以上のような資料に接した結果、私は「させていただく」が、戦前の東京ではほとんど流通しておらず、戦後、それも昭和三〇年代以降に広まった表現であると理解したのである。同時にこれら資料から、この謙譲表現の近年の使われ方が、多くの識者にたいへん強い抵抗感を与えていたことを、ひしひしと感じさせられたのである。

明治・大正における「させていただく」の使用例

「させていただく」は、『暖流』や『伊豆の踊子』だけでなく、もっと多くの文学作品で見つかるのではないか。そう考えて、「させていただく」を拾い集める作業を行なった。CD-ROM版の新潮文庫のシリーズ、そして青空文庫や国文学資料館、日国オンラインなどのインターネット資料を検索し、さらにさまざまな印刷物を渉猟した。

その結果、三遊亭圓朝、幸田露伴、樋口一葉、二葉亭四迷に始まり、徳富蘆花、尾崎紅葉、夏目漱石、国木田独歩、泉鏡花、森鷗外（林太郎）、芥川龍之介、田山花袋、武者小路実篤、菊

池寛、倉田百三、正宗白鳥、里見弴、志賀直哉といった明治・大正の文豪たちが、驚くべきことに、こぞって「させていただく」を用いていることが判明したのである。同様に、これより一代前の表現と考えられる「させて（さして）もらう」もまた、数多く見かけられた。

以下に、昭和二年の『伊豆の踊子』以前の「させていただく」の例をピックアップして、古い順に掲げることにしよう。なお表記は、引用元の表記のままとした。

①『菊模様皿山奇談』（三遊亭圓朝・明治四［一八七一］年）

さて此の若江の家へ宗桂という極感の悪い旅按摩がまいりまして、私は中年で眼が潰れ、誠に難渋いたしますから、どうぞ、御当家様はお客さまが多いことゆえ、療治をさせて戴きたいと頼みますと、慈悲深い母だから、母「療治は下手だが、家にいたら追々得意も殖えるだろう、清藏丹誠をしてやれ」

②『五重塔』（幸田露伴・明治二五［一八九二］年）

御上人様、大工は出来ます、大隅流は童児の時から、後藤立川二ツの流義も合点致して居りまする、為せて、五重塔の仕事を私に為せていたゞきたい、それで参上ました、

③『十三夜』（樋口一葉・明治二八［一八九五］年）

母親はほた〳〵として茶を進めながら、亥之は今しがた夜學に出て行ました、あれもお前お蔭さまで此間は昇給させて頂いたし、課長様が可愛がつて下さるので何れ位心丈夫であらう、是れと言ふも矢張原田さんの縁引が有るからだとて宅では毎日いひ暮して居ます、

④『片恋』（ツルゲーネフ『アーシャ』の二葉亭四迷訳・明治二九［一八九六］年）

アンナというのが本名ではあるが、ガギンはアーシャとばかり云いますから、私にもそう云わせて戴こう

⑤『今戸心中』（広津柳浪・明治二九［一八九六］年）

「お酌をさせていただきましょうね」と、箸笥を放れて酌をした。

⑥『不如帰』（徳富蘆花・明治三一～三二［一八九八～九九］年）

加藤のお嬢様がおいで遊ばしたら、どんなにおにぎやかでございましょう。――本当に私なぞがまあこんな珍しい見物さしていただきまして

⑦『続続金色夜叉』（尾崎紅葉・明治三六［一九〇三］年）

「それぢや旦那は間抜なのぢや御座いませんか。そんな

解らない事が有るものですか」

「間抜にも大間抜よ。宿帳を御覧、東京間抜一人と附けて在る」

「その傍に小く、下女塩原間抜一人と、ぢや附けさせて戴きませう」

⑧『火の柱』（木下尚江・明治三七［一九〇四］年）

暫く振りで梅ちやんの琴を聴かせて頂きませう

⑨『其面影』（二葉亭四迷・明治三九［一九〇六］年）

「そんなら、そう為せて戴きます」と哲也にも似ず思切り好く、決然言って、

⑩『虞美人草』（夏目漱石・明治四〇［一九〇七］年）

せんだって中欽吾がまた、いろいろ御厄介になりまして、御蔭様で方々見物させていただいたと申して大変喜んでおります。

⑪『竹の木戸』（国木田独歩・明治四一［一九〇八］年）

私は『中の部屋』のお戸棚へ衣類を入れさして頂ければ尚お結構で御座ます

⑫『妖術』（泉鏡花・明治四四［一九一一］年）

近頃はただ活動写真で、小屋でも寄席でも一向入りのない処から、座敷を勤めさして頂く。

⑬『樺太脱獄記』（コロレンコ・森林太郎訳・明治四五［一九一二］年）

只少し火に当らせて戴いて、煙草を一服喫んでしまへば、直ぐに出て行きます。

⑭『桑の実』（鈴木三重吉・大正二［一九一三］年）

ではまたあとでゆっくり見させて戴きますから

⑮『高瀬舟』（森鷗外・大正五［一九一六］年）

それがお牢にはいってからは、仕事をせずに食べさせていただきます。

⑯『孤独地獄』（芥川龍之介・大正五［一九一六］年）

自分のやうなものでも相談相手になれるなら是非させて頂きたい

⑰『ある僧の奇蹟』（田山花袋・大正六［一九一七］年）

其時分には慈海はもう一人ではなかった。群集の中の信者は、代り代りにやつて来てゐた。出来るならば、師の洗ひすゝぎをさせて頂きたい、朝夕の食事の世話をしたい、水を汲んで上げたい、高恩に報ゆるための労働に服したい。

⑱『末枯』（久保田万太郎・大正六［一九一七］年）

それは惜しいこと。——小山先生にはいつぞやお目にかゝ

らして頂きましたが、川田さんの旦那には、かけちがつて、私はまだ一度もお目にかゝりません。

⑲『松井須磨子』（長谷川時雨・大正八［一九一九］年）

一度お目にかかって有ったけの涙をみんな出さして頂きたいようです。

⑳『或る女』後編（有島武郎・大正八［一九一九］年）

報正新報も拝見させていただきました。

㉑『友情』（武者小路実篤・大正八［一九一九］年）

私は余程、武子さまにおねがいして画の本を拝見さして戴きたいと申しかけましたがやめました。

㉒『真珠夫人』（菊池寛・大正九［一九二〇］年）

あのう、お母様！　妾は一寸失礼させていたゞきたいと思ひますわ。

㉓『愛と認識との出発』（倉田百三・大正一〇［一九二一］年）

・それから後初めて私の言いたいことをあなたに述べさせていただきたい。

・自分は大森に来てからいろいろと考え抜いたあげく、玄関の入口の壁に次のごとく書いた貼り紙をした。「医師の注意により、面談は水曜日と仮りに決めさせて戴きます。ただし切迫した心持ちの方にはいつにてもお目にかかります」。

㉔『都会の憂鬱』（佐藤春夫・大正一二［一九二三］年）

あなたの顔を描かせていただきたいものですね

㉕『生まざりしならば』（正宗白鳥・大正一二［一九二三］年）

奥さんのを一度聴かせて頂きたいつて、三子さんによくさう云つてゐるんですよ

㉖『多情仏心』（里見弴・大正一三［一九二四］年）

御免こうむって、あたしもこちらでお相伴させて頂きます

㉗『痴情』（志賀直哉・大正一五［一九二六］年）

もうほんとにあなたを信じさせて戴き升。

以上のように文学資料に見るかぎり、東京では明治・大正期にも、「させていただく」は、ごく普通に世間に通用していたのではないか、と思われるのである。紙幅の関係でいちいち文献は挙げないが、昭和に入ってからも「させていただく」は、島崎藤村・岡本かの子・尾崎士郎・横光利一・太宰治・林芙美子・徳田秋声・上林暁・芹沢光治良・坂口安吾など、各時代の代表的な作家に盛んに用いられている。戦前の東京には、「さ

せていただく」はなかったという記憶と、この豊富な文献との矛盾を、どのように捉えるべきなのだろうか。

「させていただく」を使用する階層

古くに、「させていただく」がどのような用いられ方をしていたのか、若干の分析を試みてみよう。

①『菊模様皿山奇談』では、旅按摩がご当家様に療治を「させていただきたい」と頼み、②『五重塔』では、大工が御上人様に五重塔の仕事を「させていただきたい」と懇望している。身分の高くない男性がそれぞれ高位の人物に身を屈し、慈悲の判断を請うている。いずれも謙譲語として適切な使い方といえるだろう。明治前期の東京で、畏れ多い人々に接する作法として、按摩や職人はすでに「させていただく」敬語を使用するというたしなみを持っていたものと見ることができる。

③『十三夜』では、お金持ちの家に嫁いだ娘・お關が夜に実家に戻ってきたおり、その母親がお關の弟・亥之助について、おかげさまでこのあいだは「昇給させていただいた」と語るのであるが、その昇給は、お關の夫・原田の「縁引（えん）」のおかげをこうむっているからだと、心からありがたがっているのである。お關の実家は裕福ではなく、つつましやかに暮らしている。しかしながら、この家庭で交わされる会話には江戸っ子の訛りはなく、品格はきわめて高いものに感じられる。たとえば、

「御父様私は御願ひがあつて出たので御座ります、何うぞ御聞遊ばして」

と、これは娘・お關から父親に向けての言葉で、「遊ばせことば」を用いている。「遊ばせことば」は、よく知られるように、もとは上方の男女の言葉であったが、徳川時代に江戸の「武家ことば」として女性に限定して用いられ、明治維新を経て「山の手ことば」へと継承された。現実の家庭の経済は苦しくても、気位や矜持は高く、話される言葉は「下町ことば」ではなく、「山の手ことば」なのである。ここには作者・樋口一葉の境遇が反映されているものとみられる。樋口一葉は、父や長兄に早く死なれ、貧苦の中に生きたが、もとは士族、官吏の娘であった。

もしかすると「させていただく」は、「遊ばせ」と同様に、上層階級だった一葉の出自にまつわる「山の手ことば」ではなかったか。そうした視点に立って以後の使用例を眺めていくと、⑥『不如帰』で、浪子に付く老女・幾が「加藤（あちら）のお嬢様がおいで遊ばしたら、どんなにおにぎやかでございましょう」と語っているなど、実際、「させていただく」を用いている女性が、

同時に「遊ばせ」を用いるケースが数多いのである。「遊ばせ」階級が、「させていただく」を用いているともいえる。たとえば、⑧『火の柱』では、「させていただきます」を用いるお熊が、「如何(どんな)に御似合ひ遊ばすか知れませんよ」と語っている。そうした現象は、⑫『妖術』、⑳『或る女』後編、㉒『真珠夫人』などでも見られるものである。

こうした小説で描かれる人物の多くは、東京の「山の手」に居住する品のよい良家の人々、言いかえれば知的な上層階級、富裕層、あるいは中産階級と呼んでいい人たち、そしてこれを取り巻く人々だった。作家自身も、そうした階層の出身者が多かった。東京において「山の手」と「下町」は、すでに数多くの研究者の手によって、言葉の文化において階級的な位相差をもっていたことが明らかにされている。「させていただく」敬語についてはかつて吟味されることがなかったが、これもやはり「山の手ことば」の語彙だったのではないかと思われるのである。

奥山益朗氏が座談会の席で、

「『本日休業させていただきます』ね。これは、私は三代目の江戸ッ子なんですけれども、少なくとも戦前は言わなかったことばですね」

と発言するのは、これが山の手に限られた表現であったことを裏付けるのではないかと思われる。この奥山発言に、「言わないですね」と同調する戸塚文子氏も、日本橋浜町出身の下町っ子である。こうした下町っ子・江戸っ子たちの世界では「遊ばせ」と同様に、「させていただく」は、身分不相応の、使うべからざる言葉だったのではないか。

現実には、「本日休業させていただきます」に類いした表現は、東京の知的な上層階級によって古くから用いられてきた。たとえば㉓『愛と認識との出発』で見たように、倉田百三は、知的な読者たちに読んでもらうべく、自宅玄関の壁に「医師の注意により、面談は水曜日と仮りに決めさせて戴きます」という張り紙をしたと書いている。

さらに山本有三も、昭和一二(一九三七)年六月一八日付けの東京および大阪の朝日新聞紙上で、連載小説『路傍の石』第一部を終えるにあたって、「作者付記」として次のように告知している。

けふで第一部を終ります。第二部を書かないと、この作の意図が全く分らず、甚だ残念な次第ですが、昨年内出血をした眼の方もまだ本復せず、健康もすぐれませんので、読者諸君にも、新聞社にも申訳ありませんけれども、しばら

く休養させていたゞきます。

「休業させていただく」に限らず、「寄付させていただく」、「話をさせていただく」、「発送させていただく」などの類い、すなわち「相手に何らかの負担や迷惑、犠牲を強いる」わけではない場合、そして、相手からなんら恩恵にあずかることのない場合における「させていただく」の使用は、実際には山の手では、すでに一世紀も前から行われてきた。

たとえば、④『片恋』の「アンナというのが本名ではあるが、ガギンはアーシャとばかり云いますから、私にもそう云わせて戴こう」、⑤『今戸心中』の「お酌をさせていただきましょうね」、⑦『続続金色夜叉』の「その傍に小く、下女塩原間抜一人と、ぢや附けさせて戴きませう」、㉓『愛と認識との出発』の「私の言いたいことをあなたに述べさせていただきたい」などに見るごとくである。

「させていただく」と東西の庶民

「させていただく」が、「変なことばづかい」だとして引き合いに出される例に、永井荷風の日記の記述がある。すなわち、『断腸亭日乗』の昭和九（一九三四）年七月二一日の日記における「銀座所見」である。

松屋百貨店裏口に「出入口に集合せないで下さい」と書きたる張出しあり。集合せないとはしないと云ふことなるべし。

喫茶店テラスコロンバン店頭板圍にはりたる紙に「閉店させて頂きます云々」とあり。

去年頃より工作と云ふ語大に流行す。

ここでの「閉店させて頂きます」の記述に注目して、池田弥三郎氏は『銀座十二章』（昭和四〇［一九六五］年）の中で、次のように指摘するのである。

これは「させていただく」という、変なことばづかいの流行の例として荷風氏は書き記したのだが、偶然これによって、テラスコロンバンの店じまいの時が記録されることになった。

銀座で育った池田弥三郎氏は、下町ことばの使い手であることに誇りを持っていた。一方、永井荷風は山の手の官吏の息子として生まれ育ったが、すでに数十年、浅草や向島、銀座など下町の花街やカフェーに耽溺して、そこに生きる人々の小説を書き続けていた。そうした下町文化の担い手としての二人の感覚からすると、銀座にあって「閉店させて頂きます」の張り紙を見ることは、いささか奇異な光景と捉えられたと思われるの

である。もちろん荷風の下町小説に登場する人物たちは、「させていただく」は用いない。

ただし、下町を描く作家も「させていただく」敬語を使うことがあって、久保田万太郎は、⑱『末枯』で、東京の噺家・扇朝に、日本橋田所町の鈴むらの旦那に対して、「小山先生にはいつぞやお目にかゝらして頂きましたが」と語らせている。しかしながら、へりくだっている相手の小山先生とは、彼ら下町っ子からは階級的に隔たりのある、「新聞に関係してゐる」知識人である。下町っ子同士で、お互いに「させていただく」と謙譲し合っているわけではないのだった。

こうした東京の状況は、関西と様相を大きく異にしている。関西では、幕末・明治期には資料が少なく、古い例がなかなか管見に入ってこないが、少なくとも大正期、そして昭和初期にはすでに、上層階級のみならず、教育のない細民同士の会話にも、相手に向けた「させていただく」敬語が普及していた。大正から昭和初期にかけて録音された、初代桂春団治のSPレコードの『上方見物』など、いくつかの作品から、庶民同士で交わされた「させていただく」を拾ってみよう。

○『上方見物』（初代桂春団治・『初代桂春団治落語集』東使英夫編）

なるべくなら真ん中のとっから取って・・取らしていただきたいと思いますが（大阪見物に来た遠国の男が、道頓堀のあんころ餅屋に。遠国の男でありながら、終始、大阪弁で会話）

○『厚化粧』（曾我の家五郎・『曾我の家五郎喜劇全集 第一編』（大正一一［一九二二］年）

私も目の正月をさして頂きませう（女中が、女主人の前で、呉服屋の番頭に）

○『尻餅』（五代目笑福亭松鶴・「上方はなし」第20集・昭和一二［一九三七］年）

このお長屋は始めてだすけど、横町の方はズーッと親爺の代から搗かして貰うてまんね。また寒には何卒掻餅を搗かして頂きます様に、ヘエお願申します（長屋の「良人さん」が「餅屋はん」に扮して、嗅を相手に語る）

このように関西では「させていただく」敬語は、「させてもらう」敬語とともに、庶民にまで行きわたっていた言葉であった。岩淵悦太郎氏は昭和一三年に赴任した大阪で、こうした関西の大衆文化の上に立った「本日休ませていただきます」の看板を、あちこちの店舗で見かけることになったのである。

戦後、日本は高度経済成長を遂げ、国民の多くが貧しさから

脱し、豊かになった。そして一億総中流という国民意識が生まれたのは、昭和三〇年代後半（一九六〇年代）のことだった。国民全体が横並びで一階級上がったのである。まさにこの時代、東京ではかつて山の手の階級にのみ特権的に使用されていた「させていただく」が、まずは東京の一般市民の間に流出し、やがて日本の国民全体に普及したのである。ただしその流出・普及には、敬語の先進地でありつづけてきた上方、とりわけ京都からの絶え間ない文化的圧力が後押ししたことだろう。

近年、「させていただく」の用途はさらに広がりを見せている。女優・宮沢りえが、記者会見で関脇貴花田と「結婚させていただきます」と発言して物議をかもしたのは平成四（一九九二）年のことだった。十数年たった今でも、この言い方はおかしい、と違和感を覚える大人たちは数多いが、若い世代を中心に、「結婚させていただきます」や「結婚に向けていいお付き合いをさせていただいております」などは、もはやごく自然に使われているのである。

戦前の東京に「させていただく」がなかったとされた理由

奥山益朗氏が「戦前は言わなかった」と証言し、戸塚文子氏が「言わないですね」と同意し、池田弥三郎氏が「変なことばづかい」と断じたのは、それぞれのご出身が、東京の下町であったからであることについてはすでに見てきた。では、それ以外の人たちもなぜ、戦前の東京には「させていただく」がなかったかのように回顧し、あるいは「本日休ませていただきます」や「寄付させていただきます」などの流行について、異物に触れるような不快感を覚えたのだろうか。

この疑問に対するいちばん明快な答えは、そうした論者の中に、東京の山の手の出身者が誰もいなかったということであろう。多くは地方の出身者だったのである。大石初太郎氏は静岡県、中野重治氏は福井県、岩淵悦太郎氏と渡辺友左氏はともに福島県、新村出氏も「関東の人間」ではなく宮城県のご出身である。大学進学や就職によって東京居住者となり、生活上の要請から共通語・標準語の使い手にはなったかもしれないが、必ずしも山の手ことばの使い手となったわけではなかったろう。たとえば私自身、滋賀県に生まれ、大学生活を京都で送り、大阪で就職したが、京・大阪の上層階級の生活に一度たりとも組み込まれたこともなく、そのことばについていかほどに知悉しているか、今もってはなはだ心もとないのである。似たような事情が、これら論者にもあったのではないか。

「させていただく」敬語は、大阪など関西の庶民の間で古く

から用いられてきたことは知られていたが、じつはこれが同時に、近代国家日本を建設した山の手のお歴々の言葉であり、漱石・鷗外をはじめとする文豪たちの芸術の語彙であったことは、まったく知られていなかった。「慇懃無礼」「責任転嫁」「卑屈に聞こえる」「嫌な用法」などと、あからさまに不快感が表明されたのは、こうした偏った前提に立っていたことが作用していたのではないか。もし「させていただく」敬語の、東京の山の手における歴史が知られていたとしたら、この言葉に向けられた眼差しは、明治の知性と品格の威光を浴びて、いま少し穏やかなものとなっていたのではないだろうか。

主要参考文献
田中章夫『東京語』（明治書院・一九八三）
杉本つとむ『東京語の歴史』（中央公論社・一九八八）
飛田良文『東京語成立史の研究』（東京堂出版・一九九二）
菊地康人「変わりゆく「させていただく」」（『言語』一九九七年六月号所収）
松村明『増補　江戸東京語の研究』（東京堂出版・一九九八）
付記　岡島昭浩氏主宰のインターネット・ホームページ「ことば会議室」では、二〇〇五年に「させていただく」について議論がある。また同氏による記事「させていただく」（『ことばの海』）には、数々の文献例が提示されていて、大いに参考となった。

（まつもと　おさむ／本学非常勤講師）